

大学生にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような体験なのか

—自由記述と半構造化面接によるボトムアップアプローチ—

大谷 宗啓*

アブストラクト邦訳

本研究ではボトムアップ型の手法を用いて、友人関係における状況に応じた切替が大学生にとってどのような主観的体験であるのかに迫った。自由記述調査と半構造化面接の結果、(a) 状況に応じた切替は現代青年特有の新奇な行動ではなく既知の一般的なメカニズムに則った対人行動として理解可能であること、(b) 特定の目的・志向性に結び付いた行動ではなく多用途な行動であること、(c) 彼らは状況に応じた切替を実行せずに済めばその方が楽であると考えていること、(d) 同質他者との関係においてはコスト高だが、異質他者との関係においては利得がコストを上回ると認識していること、(e) 現在の学生生活への適応のみならず将来の職業生活への適応も強く意識していることが示された。以上の結果から、従来の研究では新奇性に注意が払われてきたが、新奇性のみならず一般性にも注意を払うことと、生涯発達の観点から検討することが重要であると提起した。

University Students' Subjective Experiences of Their Situational Changeovers in Relations with Friends

Bottom-Up Approach by Open-End Questionnaire and Semi Constructed Interview

Munehiro OHTANI

Abstract

This article explored the university students' subjective experiences of their situational changeovers in relations with friends. The results of open-end questionnaire and semi constructed interview indicated that: (a) situational changeovers were not so much contemporary adolescents' novel interpersonal behavior as understandable interpersonal behavior on the code of known universal mechanisms; (b) they were versatile behavior for any orientations; (c) university students did not want to act them in case of unnecessary to situational changeovers; (d) they recognized high costs above benefits in relation with homogeneous others, on the other hand, they recognized high benefits above costs in relations with heterogeneous others; and (e) they were sensitive about adaptation to not merely present student life but also future working life. Based on these results, this article propounded the significance of life span developmental perspective and pay better attention to not merely novelty but also universality on such studies.

キーワード：友人関係、状況に応じた切替、選択的關係、希薄な関係、生涯発達、friendships, situational changeovers, selective relations, superficial relations, life span development

* 滋賀大学教育学部

問題

状況に応じた切替とは

青年が悩みや心配事の相談相手として最も選択するのは近所や学校の友人である（内閣府政策統括官，2009）。悩みや心配事を打ち明けることを通して青年は、情緒的な安心感・安定感、自己の客観視、人に対する思いやりや配慮の心を得る（宮下，1995）。そうして彼らの友人関係は、心理的離乳の補償であったものから集団に開いたものへと成熟していき、彼らのアイデンティティの確認を援助する（西平，1990）。このように、青年期の友人関係は彼らの社会化と個人化に重要な役割を果たしている。

その役割が危うくなっているのではないかと危惧する形で1980年代後半に登場した（岡田，2016）のが希薄化論であった。青年に、全人格的な融合を避け疎隔的・部分的な関係にとどめようとする志向性（松井，1990）、自己開示や傷つき・傷つけられることを避け表面的で円滑な関係を求める傾向（和田，1990）が見られるとした議論である。希薄化論の特徴は、対人志向性の変化という形で世代効果ないし時代効果を仮定したことと、適応指標との関連に注目したことであった。世代効果ないし時代効果については、比較可能な調査データのある1989年から2010年においては顕著な変容は確認できなかった（岡田，2016）。適応指標との関連については、青年期前期においては希薄化論の仮定が良く当てはまるが、青年期後期においては必ずしも当てはまらない（石本，2011；岡田，2010）。いずれにせよ、希薄化論を参考に項目作成された尺度を広く用いてきた友人関係研究は、希薄化論の強い影響下で知見を集積してきた。

それを強く批判し相対化する形で1990年代末頃に登場した（辻，2016）のが選択化論であった。高まっているのは希薄さではなく、状況や気分に応じて複数の相手・複数の自己を使い分ける柔軟さであるとした議論である（浅野，2015）。選択化論の特徴は、希薄化論と同様に世代効果ないし時代効果を仮定したこと、適応指標との関連に注目したこと、また、自己の多元化を仮定したこと、対人志向性としての捉

え方と対人スキルとしての捉え方が混在していたことであった。世代効果ないし時代効果については、検討結果が一貫しない（浅野，2015；福重，2016；菅原，2011）。適応指標との関連および自己の多元化の仮定についても、支持的（e. g. 西田・沖林・大石，2011）・不支持的（e. g. 奥田，2009）両方の結果が得られてきた。但し、同一指標との関連で矛盾が見られた訳ではないため、更なる検討によって原因の切り分けと議論の精緻化がもたらされる可能性がある。

以上のように、希薄化論も選択化論も、世代効果ないし時代効果の仮定で足踏みしてきた。しかしそもそも、両論が指摘した現代青年像は、年代的により古く、また必ずしも青年に限定しない人間像であった、カメレオン人間（Snyder，1987）、シゾイド人間（小此木，1980）、プロテウスの人間（Lifton，1967）、他人指向型（Riesman，Glazer，& Denney，1950）、アーバニズム（Wirth，1938）等と軌を一にしている。それら先行議論が、ポスト近代の大衆社会・消費社会という意味での現代性に注目したことを振り返れば、世代効果ないし時代効果の仮定の適否を検討するには、近代ないし近代的環境との比較が必要であろう。その比較検討が困難である一方、それ以外の仮定については検討可能性が高く、青年理解の糸口として有用と考えられる。

そこで大谷（2007）は、友人関係において状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替えることを「状況に応じた切替」、その下位分類として、自己のあり方を切り替えることを「自己切替」（項目例「その場の雰囲気によって、自分のキャラ（性格）が変わる」）、関係対象を切り替えることを「対象切替」（項目例「恋愛相談をする友人と、進路の相談をする友人は違うと思う」）と定義し¹⁾、従来の知見を再検討するための観点として追加することによって、友人関係をよりよく説明できることを示した。先行議論に対する特徴は、検討困難な世代効果・時代効果の有無をア priori に仮定しないことと、対人志向性や対人スキルではなく対人行動として捉えたことであった。

先行研究の成果

上述の定義による大谷（2007）の尺度、及びその改変版を用いた研究群では、自己切替と対

象切替は比較的強い正の相関を示すにも拘らず、他の変数との関連では大きな差異を見せている。自己切替は、基本的信頼感と負の(丸野, 2014)、自我同一性の感覚および個人志向性と負の(大谷, 2005)、自尊心と負の(松島, 2011)、不安・懸念と正の(斎藤・野中, 2011)、心理的ストレス反応と正の関連を示し(大谷, 2007)、友人に対して積極的だが深入りしない(松島, 2011)。一方、対象切替は、基本的信頼感、自我同一性の感覚、自尊心、不安・懸念、心理的ストレス反応のいずれとも関連を示さず、個人志向性および社会志向性と正の(大谷, 2005)、抑うつと負の関連を示し(大谷, 2009)、友人に対して積極的で深入りも求める(松島, 2011)。

Matsushima (2013) は大学生を対象に、自己切替、対象切替、および対人的自己効力感尺度の得点を投入したクラスタ分析を行い、クラスタ間で適応感および友人関係満足度を比較した。その結果、自己切替・対象切替の得点が低く対人的自己効力感の高いクラスタが最も適応的で、自己切替・対象切替の得点が高く対人的自己効力感の低いクラスタが最も不適応的であった。そして、自己切替、対象切替、および対人的自己効力感の全てが高いクラスタは最も適応的なクラスタと同等の適応度を示した。但し当該クラスタは回答者の10.9%にとどまり、切替行動をとる者が青年の7割前後に上ること(岩田, 2006; 大谷, 2013)に比すとかなり少ない。同じく大学生を対象に大谷(2013)は、自己切替、対象切替、および切替に伴う情報処理を測定するため社会的情報処理モデル改訂版(Crick & Dodge, 1994)²⁾を元に作成した切替メタ・スキル尺度³⁾の得点を投入したクラスタ分析を行い、クラスタ間で親和欲求、自身の満足、および関係相手の満足の推定を比較した。その結果、自己切替、対象切替、および切替メタ・スキル得点の全てが高いクラスタが、全て低いクラスタよりも親和欲求得点および関係相手の満足の推定値が高かった。但し当該クラスタは回答者の26.4%にとどまった。また、自己切替得点は高く切替メタ・スキル得点が低い者は相当数見られたが、対象切替得点は高く切替メタ・スキル得点が低い者は見られなかった。

高校生と大学生の間で自己切替の横断比較を行った斎藤・野中(2011)では、自己切替の校種差は見られなかった。中学生、高校生、および大学生の間で横断比較を行った丹羽(2012)でも自己切替の校種差は見られず、対象切替は中学生よりも大学生の方が行っていた。

これらの結果から、(a) 自己切替も対象切替も適応的に機能し得るものの、効果的な運用には対人スキルの高さが前提となる；(b) 青年期前期から実行されることの多い自己切替では運用に失敗して不適応状態に陥ることも多く、青年期後期になってから実行されることの多い対象切替では運用失敗が相対的に少ない。そのため、先行研究が主に扱ってきた大学生において自己切替と対象切替は相伴って出現しやすいものの、適応指標との関連では大きな差異を見せるものと考えられる。平石(2010)が指摘する通り、状況に応じた切替を可能とする背景要因や発達的变化の検討を進める必要がある。

本研究の課題

以上のように、状況に応じた切替についてはこれまで、適応的に機能する可能性とその前提条件に集中して検討されてきた。その展開には、友人関係研究が主にメンタルヘルスや心理的適応への影響に焦点を当ててきたこと(平石, 2010)が影響したと考えられる。しかしながら、青年理解のためには現象から出発して常に現象にもどらなければならない(落合, 2003)。とりわけ、状況に応じた切替、およびその背景となった希薄化論・選択化論に関する実証的研究は、社会的言説の検討として登場した経緯からトップダウン型の手法を用い、言説の主体=成人社会の視点から青年を客体として捉えてきた。その偏りを相対化し補完するため、青年の主観的体験について知っておく必要がある。

そこで本研究は、ボトムアップ型の手法を用いて、青年にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような主観的体験であるのかに迫ることを課題とした。関係性の範囲は同性友人関係に限定し、調査対象者にも書面および口頭で説明した。その理由は、同性友人に対する期待と異性友人に対する期待は異なり(Coleman & Hendry, 1999)、両者の混淆を避ける必要があるためである。調査対象には大学生

を選んだ。その理由は、先述の通り対象切替は大学生で増加することから、多様なエピソードを収集するには大学生が適しているためである。

研究デザイン

上述の課題に本研究は以下のデザインで臨んだ。まず、自由記述調査によって状況に応じた切替の具体的なエピソードを収集する（調査1）。多様性の探索を目的とするため分析にはKJ法（川喜田，1967）を用いた。なお、筆者による分析には無意識に先行知見に沿った構造化がなされてしまう可能性が伴う。そこで対人関係論以外を専攻し関連論文も読んでいない者を分析協力者とし、解釈に影響するグループ名も分析協力者が命名した。次に、分析の妥当性、および研究枠組みの発展と確認を図るため、相互気づき法（白井，2008）を参考に、分析結果と解釈を青年に示して意見を求めた（調査2）。

既に見た通り、切替行動をとる者は青年の7割前後に上り、少なくともここ20年間は顕著な変化が確認されていない。斉一性の圧力が働くであろう高率に至りながら漸増しないということは、切替行動をとる理由と共に、切替行動をとらない有力な理由もまた存在すると考えられる。それを探るため、エピソードを想起しなかった回答者と、想起した回答者の両方に半構造化面接を実施した（調査2）。

希薄化論や選択化論で論じられた内容は青年よりも成人で多く見られる可能性が指摘されながら（岩田，2006）、青年と成人を対比した検討は充分行われてこなかった。本研究では青年と成人の語りを対比することで、青年期ならではの特徴の探索を試みる（調査2）。本研究ではHavighurst（1972）を参考に、職業人経験の有無で青年と成人を区別した。なお、青年大学生と有職成人とを対比した場合、発達の効果と生活環境の効果が混淆する。そこで、職業人経験を有さない者を青年学生、職業人経験後に入学した者を成人学生とし、同一県内に在住し同一大学・同一学部に通う学生の中で対比することで生活環境の効果を統制した。また、既に見た通りここ20年間は顕著な変化が確認されていないことから、青年学生と成人学生の年齢差を20歳以内に収めることで世代効果を統制した。

倫理的配慮

自由記述調査回答者の権利保障および同意確認は、調査票冒頭に、協力は自由であること、途中で回答を取りやめる権利も保障されること、回答結果は個人が特定されない形で論文・学会発表等により公開されることを明記し、同意確認欄への記入を求める形で行った。面接調査対象者の権利保障および同意確認には、鈴木（2005，pp80-81）の書式による面接承諾書を用いた。

調査1

目的

自由記述調査によって、状況に応じた切替のエピソードを収集する。

方法

調査の対象と手続き 関西地方の国立大学教育学部生64名（男性31名、女性33名；平均18.81歳、 $SD=1.61$ ）。講義内容が回答に影響することを避けるため、関連する内容を取り扱わない学習心理学系必修科目の受講者を対象とした。2010年7月、講義終了後の教室で無記名式の調査票を筆者が配布し、その場で回答を求めた。調査票配布数は68人分、応諾率は約94%、所要時間は約10分間であった。

調査の内容 教示文『同性の友人たちとの日頃のお付き合いを思い浮かべながら、以下の質問にご回答ください』の後、以下2問への回答を求めた。(a) 自己切替『日頃のお付き合いの中で、何らかの理由で、あなた自身の「キャラ」（キャラクター、性格）を意識的に切り替えている、あるいは無意識に⁴⁾切り替わっていると感ずることはありますか』と尋ね、有無の択一選択と、有る場合には具体的なエピソードの記述を求めた⁵⁾。「キャラ」と「キャラクター」の間で何らかの区別がなされている可能性があるため（瀬沼，2007）、両表現併記によって多様な記述の収集を試みた。想起内容が制限・方向付けられることを避けるため具体例は例示しなかった。(b) 対象切替『日頃のお付き合いの中で、何らかの理由で、いっしょに行動したり話したりする相手を意識的に切り替えている、あるいは無意識に切り替わっていると感ずることはありますか』と尋ね、自己切替と同じ方法で回答を求めた。

結果と考察

自己切替 択一選択で「有」を選んだ者の比率（以下、想起率）は62%であり、先行研究での肯定率と比べて大きな差は見られなかった。

具体的なエピソードの自由記述 44 個（0 個 2 名、1 個 31 名、2 個 5 名、3 個 1 名）を 1 個ずつ書き出し、対人関係論以外の心理学を専攻する 20 代中盤の大学院生 1 名と筆者が KJ 法による分析を行った。得られた KJ 法 A 型図解と記述例を Figure 1 と Table 1-1、1-2 に示す。

Figure 1 からは、目的の設定、その達成に関わる諸要因の考慮、具体的な行動選択のまとまりが見て取れる。このまとまりは社会的情報処理モデル改訂版（Crick & Dodge, 1994）と大枠

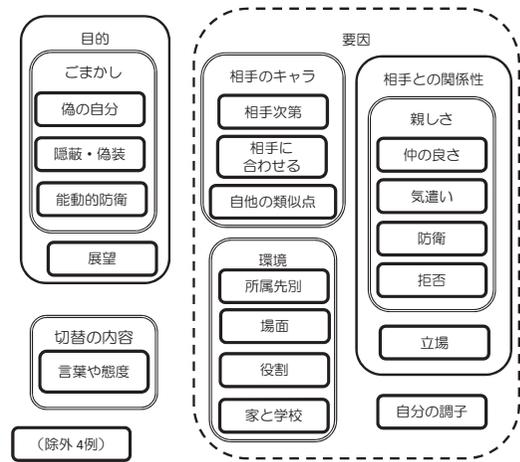


Figure 1. 自己切替に関する KJ 法 A 型図解。

Table 1-1. 自己切替に関する自由記述 (1/2)

第5グループ	第4グループ	第3グループ	第2グループ	第1グループ	ID	No	script
自己切替 (1/2)	目的	目的	ごまかし	偽の自分	32	127	自由に行動して理解してもらえないかわからない。そういう仲を友人と呼ぶのかどうかは別。
					57	141	高校時代の人間関係の問題で、他人を怒ることができなくなってしまった。性格を極めて地味に温和にしようとしてしまう。
					61	143	★表面上仲良くするためにつけている自分。素に近い自分。しかし、友だちや他人にみせる自分は本当の自分ではない。
					04	104	★考えが異なっている場面が多いが、それを出さないようキャラクターをつけている。
					11	114	初対面の友だちは、女の子らしくなってそう。
			10	111	★バリアをはるためにキャラをつけている。		
			51	137	★より親密になるには、しんどくないテンションでいる。		
			29	125	★付き合う人によって対応が変わる。		
			33	128	相手によって、よくしゃべったり、だまったりする。		
			53	139	いつもはいじられるキャラだが、人によってはいじるキャラになったりする。		
	14	115	★付き合う人が活発であったら、さばさばできるが、おとなしめの人であれば、それに合わせている。無意識。				
	44	133	★ある程度相手のキャラに合わせたキャラを作り出している気がする。				
	51	136	元気でテンションの高い友人には、自分のいつものテンションで対応するけれど、大人しくて口数の少ない子には、自分のテンションを落ち着けて、その子が話すことを大事にする。				
	07	107	★趣味が合う人には自分が「おたく」などをさらしているが、そうじゃない人には言わない。				
	40	131	アニメネタが通じる人と通じない人で話し方を少し変える。				
	03	103	★とても仲の良い人と知り合い程度の人ではキャラクターは自然と変わっている。				
	11	113	★仲の良い友だちは素で話せる。				
	27	123	★仲の良い人と悪い人。				
	20	119	あまり仲良くない人と一緒にいる時は大人しくしている。				
	21	120	★そこまで親しくない友人の前では、少し気をつかう。				
	60	142	★あまり親しくない人の前では素が出せず、その場にいることがしんどくても笑顔でいる。				
	09	109	あまり話したことの無い友人の前ではたくさん話せない。				
	19	118	★あまり親しくない友人の前では、無意識的に、自分のことをあまり話したりしてないと思う。				
	38	129	人見知りか激しすぎて、初対面の人にはとてもたどたどしい話し方になってしまう。				
54	140	★そんなに親しくない友人には自分の本当のキャラを見せないが、（おとなしく）仲の良い友人には本当のキャラを見せる。					
31	126	★嫌っている人にはものすごく冷たくなってると思う。					
40	132	★先輩と同席とかで話し方変えたりとか。					
			立場	立場	40	132	★先輩と同席とかで話し方変えたりとか。

注) 掲載スペースの都合上、Table1-1とTable1-2の2表に分割して示した。
 IDは回答者番号、Noは記述単位番号を示す。自己切替には100番台のNoをあてた。誤字・表記ゆれ等を含め原文ママ。
 ★印を付した記述単位は、調査2で提示材料に用いたものである。なお尺度作成への利用には不向きな記述も含む。

Table 1-2. 自己切替に関する自由記述 (2/2)

自己切替 (2/2)	要因(2/2)	環境	環境	所属先別	01	101
					10	110
						学校でははっきり者キャラ、地元では素の自分。
					39	130
						★地元の友だち・高校の友だち・大学の友だちで変わっている。
					45	134
						いつも一緒にいる友人の前と部活内ではキャラが違う。
					01	102
						★ある場面ではテキパキと動いているのに、環境が変わるとゆったりと動いてしまう。
					17	117
						彼女の前では“デレデレ”、普段の前では“イケイケ”。
					06	106
						バイトで塾の講師をしていて、その場ではそれらしい身振り話し方をするようにしている。
					08	108
						★普段は結構自分がつまみ込まれることが多いと思うが、仕事とかになったらボケることが全くなくなってみんなの先頭に立って引っ張っていくほうになると思う。
					11	112
						家の方がテンションが低い。
					15	116
						★家と学校で声のトーンが違う気がする。
					05	105
						★朝はテンションが低くてあまり笑わないが、昼くらいからテンションが上がるにつれて笑うことが多くなる。
					24	121
						絶望を真夜中に感じていたとしても、次の日には笑顔でいる。
					52	138
						★言葉や態度が変わる時がある。
					27	122
						女性と男性。
					28	124
						だいたいキャラは出てない。
					49	135
						★学校が変わると少しかわっている気がする。
					64	144
						中学生の頃と高校生の頃でキャラは変わった。中学生の頃は、もう少し男の子っぽかったような気がする。
(除外)	(除外)	(除外)	(除外)	(除外)		

注) 掲載スペースの都合上、Table1-1とTable1-2の2表に分割して示した。
IDは回答者番号、Noは記述単位番号を示す。自己切替には100番台のNoをあてた。誤字・表記ゆれ等を含め原文ママ。
★印を付した記述単位は、調査2で提示材料に用いたものである。なお尺度作成への利用には向かない記述も含む。

で一致する。勿論、今回のデータは複数人の自由記述の集積であり個人内の情報処理過程を捉えたものではない。しかし、得られた記述が現代青年特有の新奇なものではなく、一般的な対人メカニズムの枠内で理解可能であったことが指摘できる。除外グループには、調査冒頭で同性友人関係に限ると説明したにも拘らず相手の性別(No.122)が挙げられた。これは先に見たように同性友人に対する期待と異性友人に対する期待の異なりが彼らの行動を強く規定していることの反映と考えられる。他には、過去と現在との比較(No.135, No.144)、切替の頻度(No.124)に関わる記述が見られた。

第3グループ水準の“目的”の内容を第1グループ水準で見ると、“偽の自分”は見せかけの自己行動(Harter, Marold, Whitesell, & Cobbs, 1996)、その他はTedeschi & Norman (1985)⁶⁾にならい、“ズレの隠蔽”は戦術的・防衛的な、“能動的防衛”は戦略的・防衛的な、“展望”は戦略的・積極的な自己呈示と整理できる。第4グループ水準の“要因”の内容を第2グループ水準で見ると、“相手のキャラ”は関係的自己(Curtis, 1991)、“親しさ”は社会的浸透理論(Altman & Taylor, 1973)、“立場”は階層的関係調整(Takai & Ota, 1994)、“環境”は役割理論

(Biddle & Thomas, 1966)で解釈できる。

即ち、自己切替とは現代青年特有の新奇なものではなく既知の一般的な対人メカニズムで理解可能であること、特定の目的、志向性に結び付いた行動ではなく多用途の行動であることが読み取れた。

対象切替 想起率は28%であり、先行研究での肯定率と比べて明らかに低かった。大谷(2007)の尺度と半構造化面接とを併用した和田(2010)は、状況に応じて接する相手を変えている意識が低いため発話を得られなかった面接対象者がおり、自己切替に比べて対象切替に関する発話数が少なくなったことを報告している。そのため、先行研究のように具体的な質問項目への反応を見た場合の肯定率は高く、本研究のように具体的なエピソードを求めた場合の想起率は低くなるものと考えられる。

自由記述16個(0個1名、1個16名)の分析結果をFigure 2とTable 2に示す。

Figure 2からは、目的の設定、その達成に関わる諸要因の考慮のまとまりが見て取れる。自己切替で見られた行動選択の記述が見られなかったのは、相手を替える以外の実行手段が無いとめと考えられる。なおNo.208は対象切替ではなく自己切替に相当するものとして除外された。

第2グループ水準の“目的”の内容を第1グループ水準で見ると、“友人間のバランス”は社会志向性、“自己研鑽”は個人志向性と解釈できる。第3グループ水準の“要因”の内容を第1グループ水準で見ると、“活動の内容別”、“話題の内容別”、および“共通の趣味”はハイ・セルフモニターの特徴 (Snyder, Gangestad, & Simpson, 1983)、“話題の重要度”は社会的浸透理論 (Altman & Taylor, 1973)、“相性”は同類

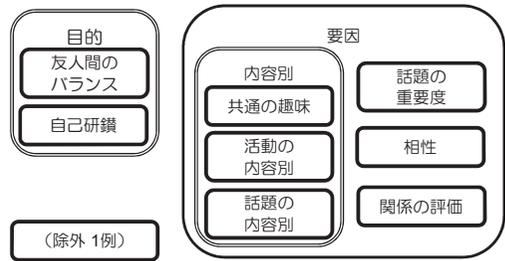


Figure 2. 対象切替に関するKJ法A型図解。

Table 2. 対象切替に関する自由記述

第4グループ	第3グループ	第2グループ	第1グループ	ID	No	script	
対象切替	目的	目的	友人間のバランス	01	201	★いつも頼みごとや相談があるときはAちゃんによくメールを送る。しかしそればかりしていると他の友だちとAちゃんとの仲の良さを比べた時にAちゃんとはかり仲良くなるということが起こってくる。それが嫌だと思うので、時によって、メールをしたり話したりする相手を変える。	
			自己研鑽	06	206	★大学での付き合いは、今まで関わってこなかったタイプの人と関わるようにしている。先生になった時に様々なタイプの生徒と円滑にコミュニケーションを取れるようになるため。	
	要因	内容別	共通の趣味	12	209	★趣味の話をする子は、同じ趣味をもった子にしかしない。	
				34	212	★友だちによって共通の趣味や話題は違うので、その内容やシチュエーションにより切り替わることはある。	
			活動の内容別	02	202	★はっちゃける友だち・部活友だち・勉強友だちなどで切り替わっている。	
				05	205	部活の時は部活の仲間と行動するが、学校生活では部活の仲間以外と行動する。	
			話題の内容別	23	210	活動する場に関して、所属する団体を変えている。	
				52	214	★話す内容で、この人に相談しようと考えてる。	
			話題の重要度	話題の重要度	04	204	深刻な問題やグチを言いたくなった時は、やはり信用できる人に話しをする。
					51	213	★自分にとって重要な話をするのは特定の人に限っている。他愛のない話は割と誰とでもする。
					62	216	本当に悩んでいることや心配なことは、一緒に行動することの多い信頼できる友達に話している。
					03	203	★一緒に行動する人は、気の合う人と行動している。
	相性	相性	56	215	★無意識に、タイプが合う子と一緒に行動する。話す。		
			10	207	★メリットとデメリットの意識があることに最近気付いた。		
	関係の評価	関係の評価	24	211	★自分が問題だと思っている事柄に関わっている人間を避ける。		
			11	208	仲良くない子は、声が高くなる。		
	(除外)	(除外)	(除外)	(除外)			

注) IDは回答者番号, Noは記述単位番号を示す。対象切替には200番台のNoをあてた。誤字・表記ゆれ等を含め原文ママ。

★印を付した記述単位は、調査2で提示材料に用いたものである。なお尺度作成への利用には不向きな記述も含む。

結合原理 (Fischer, 1982) あるいは選択的接触 (Festinger, 1957)、“関係の評価”は投資モデル (Rusbult, 1980) で解釈できる。

即ち、対象切替も現代青年特有の新奇なものではなく既知の一般的な対人メカニズムで理解可能であること、特定の目的、志向性に結び付いた行動ではなく多用途の行動であることが読み取れた。

調査 2

目的

半構造化面接を実施し、(a) 調査 1 の分析結果に対する違和感の表明を求め、分析の妥当性、および研究枠組みの発展と確認を図る；

(b) 切替行動をとる理由と、とらない理由を探る；(c) 青年学生と成人学生の語りを対比し、青年期ならではの特徴を探る。

方法

調査の対象と手続き 調査 1 回答者の中から、状況に応じた切替の具体的なエピソードを想起しなかった青年 (以下、A さん)、想起した青年 (以下、B さん)、成人 (以下、C さん) の 3 名に面接を実施した。但し、自己切替・対象切替の両方を想起しなかった面接応諾者は得られなかったため、片方を想起しなかった者を A さんとした。割当条件以外をできるだけ均一にするため全員を第 1 学年に揃え、本研究領域の先行論文・調査との接触経験がないことも確認した。2010 年 9 月、大学内の面接室で約 90 分

間の半構造化面接を筆者が個別に実施した。

調査の内容 (a) 調査1の分析結果を提示し違和感の表明を求めた。大量提示が黙従反応を招かぬよう提示材料は前掲 Table 1-1、Table 1-2、Table 2 内で星印を付した記述単位に限定した。(b) 調査1の本人回答を提示し、切替の条件、工夫、負担、効用、今後したいかしたくないか、今後すると思うか、世間一般の評価の認識と、自身の評価を尋ねた。(c) 白井 (2001) を参考に、調査1における想起率の推定を求めた後、集計結果の想起率を示して反応を観察した。

結果と考察

調査1分析結果への違和感 自己理解の記述 No.116 (前掲 Table 1-2) に対してCさんから「(“家と学校”ではなく)“場面”に入るかも」との違和感が表明された。これらは第2グループ水準でまとまるものである。また、対象切替の記述 No.214 (前掲 Table 2) に対してBさんから「(“話題の内容別”ではなく)“相性”とは別の仲の良さの度合い+“話題の重要度”かな」との違和感が表明された。これらは第3グループ水準で“要因”としてまとまるものであり、各要素は独立ではなく組み合わせて考慮されることを示すと考えられる。上記のような細部への違和感、および枠組み全体への違和感がないか調査者から再度尋ねたが、上記2点以外に違和感の表明は得られなかった。この結果は、分析結果と、行為主体である調査対象者の実感との間に大きな齟齬はなかったことを示している。

面接対象者の特徴 以降、対象者の発話は「」、調査者の発話は<>で括弧で示した。

Aさん (青年学生) : 10代終盤男性、自己切替の想起なし。発話に「部活の子たち」、「その他の子たち」が頻出し、仲間集団と外集団の境界が明確であった。また、「部活の子たちの中ではそんなに違いがあるとは思わない」と、仲間集団の同質性の高さを語った。また、交友関係を同質性の高い集団内に限定したいという志向 (辻, 2016) が明瞭に見られた。但し、大学生時代はそれで巧くいくが、就職後は異なる付き合い方が要求されると考えていた。想起率提示直後の反応は、正しい数値であるかの確認、

意識的か否かに注目した解釈の試み、沈黙を経て、不可解さの表明であった。

Bさん (青年学生) : 10代終盤女性、自己切替・対象切替とも想起あり。数名単位のユニットが複数集まったサークルが更に複数集まる多層構造集団に所属していることが語られた。知り合いではない友人同士は「どちらかと言うと紹介したい」、「別の面も知って欲しいから」。発話に「色んな子」が頻出し、異質他者との交流拡大が志向されていた。また、第三者からの評価への懸念を、関係の相互隔離 (浅野, 1995) ではなく「平等にしていると自分で思えるように行動すること」によって対処しており、自己不一致の縮小 (Higgins, 1987) に動機づけられていることが窺えた。想起率提示直後の反応は、納得のいかない表情、苦笑いを経て、集団内での位置取りに注目した解釈によって理解しようと考え込む様子であった。

Cさん (成人学生) : 20代終盤男性、自己切替・対象切替とも想起あり。就職を経て教育学部に入学した経歴から成人期 (Erikson, 1963 仁科訳 1977-1980) にあたると考えられる。他者との価値観の違いが繰り返し語られた。<価値観が合う人とだけ親しくなっていこうという事は?>→「特にないですね。まあ色んな考えがあると思うんで、そこを否定しちゃったらどうなのという事になると思いますんで (笑)」、「まあ言葉ちょっと悪いかも知れませんが、いずれ何かの役に立つとか (笑) 自分が絶対正しいという訳じゃないし、それはお互い認めていかないといけないと思うので」。異質性を認め尊重し合うこと、先々のために関係を維持することが重視されていた。想起率提示直後の反応は、啞然とした表情での笑い、大声での笑いの連続を経て、切替は当然実行すべきであるとの強い主張であった。

自己切替 代表的な発話を Table 3 に示す (以降、①~⑧は Table 3 内の参照用記号である)。

自己切替をする理由と、しない理由:

対象者3名が共通して語ったのは負担感の強さであった (①)。不平等を生じさせない (②)、言動に気を配る (③) といった工夫が強い負担感を伴っており、できればしたくないとの希望

いは、世間一般の評価の認識 (⑦) と自身の評価 (⑧) で見られた。自己切替をしていない A さんはきっぱりと否定し、自己切替をしている B さんは必要性や効用を肯定しつつ結論としては否定し葛藤を窺わせた。一方、成人学生 C さんは、世間一般は消極的に肯定していると認識し、自身も肯定的であると語った。

対象切替 代表的な発話を Table 4 に示す (以降、⑨～⑭は Table 4 内の参照用記号である)。

対象切替をする理由：

現に対象切替をしていて、今後もする (⑨) との答えで揃った 3 名だが、A さんと他 2 名との間には違いが窺えた。負担感がないことは 3 名共通である。切替の条件 (⑩) や工夫 (⑪) について聴く限り、B・C さんは決して低くないコストを払っていると考えられるが当人は負担感を否定した。A さんと他 2 名との間に違いが見られたのは効用 (⑫) であった。A さんが「意識する程のものでもない」としたのに対して、他 2 名は効用の大きさを語った。先に見た通り、A さんは交友関係を同質性の高い集団内に限定したいと志向し、他 2 名は異質他者との交流拡大を志向している。従って対象切替は、同質他者との関係においては利得が低く相対的にコスト高になるが、異質他者との関係においては利得がコストを上回るものと考えられる。

青年学生と成人学生の対比：

自己切替と同じく、世間一般の評価の認識 (⑬) と自身の評価 (⑭) で違いが見られた。青年学生 A・B さんは世間一般は否定的に評価していると認識し、自身は条件付きの肯定を示した。一方、成人学生 C さんは、世間一般も自身も肯定的であると断言した。

自己切替と対象切替の違いと共通点 違いが表れたのは負担感であり、自己切替の負担感の高さ、対象切替の負担感の無さが語られた。状況への適合を図る自己切替の方が、状況の選択、改変を図る対人切替に比べて高い負担感を伴うようである。一方、効用面では自己切替・対象切替とも共通して、同質他者との関係においては低く、異質他者との関係においては高く評価されていた。結果として自己切替・対象切替とも、同質他者との関係においてはコスト高

だが、異質他者との関係においては利得がコストを上回ると認識されていた。他に共通点として、実行せずに済む方が楽であると認識されていた。状況に応じた切替とは、その評価の如何に関わらず「できればたくない」行動である。

もうひとつの共通点は、就職後の適応が強く意識されていたことであった。今後に関する発問ふたつは、周囲に合わせて本意ではない行動をとっている場合 (岡田, 2010) を捉えるためのセットであり、今後の学校生活についての語りを想定していた。しかしながら面接対象者たちは一様に自ら、現時点の学校生活と就職後を対比させて語り出し、就職後には必要になるとの認識を示した。

全体的考察

本研究の成果

自由記述調査の結果から、自己切替・対象切替は共に、現代青年特有の新奇な行動ではなく、既知の一般的な対人メカニズムに則った行動として理解可能であり、また、特定の目的、志向性に結び付いた行動ではなく多用途の行動であると考えられた。その分析結果に対して面接対象者から表明された違和感は記述単位対象の少数にとどまり、枠組みへの違和感は表明されなかった。これは、得られた枠組みと行為主体の実感との間に大きな齟齬はなかったことを示している。希薄化論・選択化論以降の友人関係研究は、「現代青年」の新奇性に注目して青年理解・青年支援に繋げることを企図してきた。しかしながら本研究の結果は、新奇性のみならず一般性にも注目することの重要性を示している。

面接対象者の語りでは、実行せずに済む方が楽であるとの認識、同質他者との関係においてはコスト高だが、異質他者との関係においては利得が拡大しコストを上回るとの認識が共通していた。仲間集団と外集団の対比を通して自我同一性の感覚に向き合うのが青年期であり、異質他者との相互調整を伴う提携・分担関係に自己を投入するのが前成人期・成人期であるとすれば (Erikson, 1963 仁科訳 1977-1980)、状況に応じた切替とは、青年期ではなく前成人期・成

Table 4. 対象切替に関する代表的な発話

	Aさん (青年学生)	Bさん (青年学生)	Cさん (成人学生)
調査1の本人回答	No.202	No.201	No.204
切替の条件 (⑩)	「ない」	「なくとも大丈夫です」, 「あ…この間あの子と一緒に行ったから今日はあの子と一緒に行こうとか、そういう感じ…」→<過去の履歴みたいなのを>→「うん」→<先のこと>→「考えますね」→<そこが条件になっていることは?>→「あ、それはあると思います」→<それ以外は?>→「特にないですね」→<第三者が見ているとやり難いとか>→「それは大丈夫です」	「相手がいること」
工夫 (⑪)	「何にも考えてないですね (笑)」→<何も考えていないけれども多少巧んでいる?>→「はいはい」	「とにかく平等に」→<平等にしていると分かってもらいたい?>→「あ、それはいいです。私が意識的に思っていることなので、それは相手にとってはどうでもいいかなと」	「それは特にないですね」, 「一応、相手の状況を見ること。そいつが、ちゃんと聴けるような状況になっているとか、落ち込んでいる時には話をしないとか」→<性格とか割と固定的なものより…>→「そうですね。後はまあ、同じような経験してるとか」
負担	「ないですね」	「ない」が, 「どう思われているかなっていうのを考え過ぎてしんどくなることはあります」→<やめたくなることは?>→「やめたいとは思わない」, 「癖みたいなものになっているので、やめる・やめないとかそういう風に考えたことはない」	「ないですね! 全くないです」
効用 (⑫)	「捗る, 効率的にできるようになるかも」但し「そこまで…って感じですね。意識する程のものでもない」	「色んな子と話ができるんで。他の子に喋っていないことを喋ってくれたりとか。それがちょっと重い話だったりしたら、聴いて良かったなとかありますし」	「そりゃプラスになってると思います」, 「かなりのプラスだと」
今後したいか, したくないか	「別にしたくはないですね。あまり理由はないですけど」	「したいかなと思います」, 「滅茶苦茶は深くなくても、ある程度まで分かってくれる友だちがいるっていうのは安心できるし、やっぱり色んな人の考えを聞くっていうのが私は好きなんです」	「したい」
今後すると思うか (⑬)	「しない方が楽なんで、できればしたくないんですけど、仕事に就いたらそういう訳にもいかない…ような気がするんで」	「続けます」	「するでしょうね (笑)」, 「これは年齢とか関係なくて」, 「当たり前なことだと思うんですけどね」
世間一般の評価の認識 (⑬)	「否定的だと思う」	「否定されるかもしれない。何か、結構、表面上の付き合いと捉えることもあるので、そう捉えるとは否定的になるのかなと」	「肯定的だと思いますね。ていうかやってんじゃないですかね、やっぱり」
自身の評価 (⑭)	「あんまりいいものとは捉えていないけど、しなくちゃいけないとか、そういう感じに捉えていると思うんですけど」	「肯定しています」, 「色んな子の意見が聴けるっていうのがあるし、深くなくてもいいから広がるっていうのが私は好きなんです」, 「表面的とは思っていないです」→<表面的ではないということ?>ないこともある?>→「ないこともある。全部が全部、表面的じゃないので」	「肯定的ですね」
想起率の推定	「8割くらいはあると思うんですけど」	「4~5割」	「8~9割」
想起率提示直後 <想起率は28%>	「そうなんですか! ほんまなんですかね? (笑) 無意識に切り替わっていると思うんですけどね。…28%ですか…少ないですね」, 「何でなんですかね…分かんないですね」	「え、何か意外と少ないなあ」, 「意外です、ビックリしました (笑)」, 「多分、少人数で常にいるその子たちといつも一緒にいるっていう状態が多いからそう (低率) なるんかな」, 「グループが男子でも女子でも固まってる頃やったんで」	「そんな少ねえの? (笑)」, 「皆凄いなー。オープンって言うか、誰でもいいの? って思いますが、だって聞かれる方の身にもなってみよって感じじゃないですか。そんなこと俺に言われてもってことを考えると、選ばないといけないと思うんですけどね (笑)」

注) 対象者の発話は「」, 調査者の発話は<>で括った。表中の丸囲み数字⑩~⑭は本文からの参照用記号である。

期にこそ適した行動ということになる。それを裏打ちするように、仲間集団の同質性の高さを語った A さんは切替に忌避感を、多層構造集団に所属する B さんは肯定と否定を、就職経験のある C さんは当然視を示した。

もうひとつの共通点は、現時点の学生生活へ

の適応のみならず就職後の適応が強く意識されていたことであった。就職経験のある C さんは勿論、青年期の A さん・B さんも、残り 3 年半ある学生生活のみに焦点を置くのではなく、自ら就職後と対比させて語り出した。

青年学生 A さん・B さんと、成人学生 C さん

んの顕著な違いは、Aさん・Bさんが世間一般の評価は否定的であると認識していたのに対して、Cさんは世間一般の評価も肯定的だと認識していたことであった。しかしながら、「仕事に就いたらそういう訳にもいかない…ような気がする」、「社会に出たら必要やとは思うんですよ」と語ったAさん・Bさんは学生に、「でもこういうこと考えるのって歳とってからですね」と語ったCさんは成人にポジショニングしたと考えれば、彼らは同じ認識を共有しているとも考えられる。即ち彼らの主観における世間は、学生の状況に応じた切替に対しては否定的で、成人の状況に応じた切替に対しては肯定的である。

以上から、状況に応じた切替とは、その効用において青年期ではなく前成人期・成人期にこそ合理的な行動であり、社会的期待においても青年期ではなく前成人期・成人期にこそ期待される行動であると考えられる。先にMatsushima (2013)で見たように大学生活への適応を目的とする場合には実行しない方が低コストで高い利得をあげられることも傍証となろう。重要なのは、これらが彼らの語りの中に表れたこと、即ち、青年期向きの行動ではないと彼ら自身が認識していたことである。そうであるにも関わらず、青年期前期でも少なからず実行されている(丹羽, 2012)のは何故であろうか。

心理社会的早熟の可能性

ここで、「既知の一般的な対人メカニズム」とは、友人関係という文脈に限定されないメカニズムであること、また、面接対象者全員が就職後の適応を強く意識していたことに注意したい。相川(1997)は、第3次産業従事者が増え続ける産業構造の変化に伴い要求される対人関係能力が変化していることに注意を促している。経済産業省(2010)によれば、「社会に出て活躍するために必要だと考える能力要素」を企業の人事担当者および大学生に尋ねると、多くの項目で肯定率に食い違いが見られた中、コミュニケーション力の必要性については両者共に肯定率が高かった。では、そこで言う「コミュニケーション力」とは何か。同じく経済産業省が主導した社会人基礎力(社会人基礎力に関する研究会, 2006)の中で掲げられた、柔軟性(例:自

分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する)、状況把握力(例:チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する)、規律性(例:状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する)は、状況に応じた切替の定義および青年による解釈とよく合致する。即ち、青年の視点から見て、状況に応じた切替とは成人的・職業人的な対人行動であり、その習得を要求されていると感じ取った青年が前倒しで採用しているのではないか。

仮にそうであった場合、前倒しが彼らの発達を促す可能性ばかりでなく、心理社会的早熟の可能性にも注意する必要がある。鑪(1986)は、特定の危機が通常よりも早期に優勢となる場合、そこで経験されるのは通常とは質の異なる危機であり、それら心理社会的早熟が後の課題を著しく困難にする可能性を論じ、現代の日本では早熟傾向を促進しているが、そのために多くの心理的な無理ないし歪みをもたらしているようだと指摘した。本稿冒頭で見たように、青年期の友人関係は彼らの社会化と個人化に重要な役割を果たしてきた。そこに心理社会的早熟が起きている可能性は軽視できない。

本研究の限界と今後の課題

本研究では先行研究を相対化・補完するために青年の主観的経験に迫った。当然ながら本研究のみで状況に応じた切替の全貌を論じることはできない。例えば、当事者が語り得ない自覚の外側に新奇性が存在する可能性もある。本研究の分析対象者は第3次産業である教育・学習支援業への就職を主とする教育学部生であった。就職先が多岐にわたる学部・校種でも同様の結果が得られるとは限らない。本研究では個性記述的方法をとり、面接調査対象者にも特徴的と考えられた者を選定した。これらは仮説生成のための手法であり、今回得られた知見は次の検証研究の足がかりと位置づけられる。

以上の限界を踏まえつつ本研究は、新奇性のみならず一般性にも注意を払うことと、生涯発達の観点から検討することを、今後の重要な課題として提起する。

<注>

- 1) 本研究では大谷（2007）および後続研究での定義に従い「自己切替」と「対象切替」に区分したが、大谷（2007）の因子分析では志向性が異なる複数の因子に細分されていた。これは後述するように状況に応じた切替が、特定の目的、志向性に結び付いた行動ではなく多用途の行動であることの一部を掴んでいたのかも知れない。
- 2) 符号化、解釈、目標の明確化、反応検索と構築、反応決定、行動実行の6ステップをデータベースに照らしながら循環処理する過程としてモデル化したものである。
- 3) 上述の社会的情報処理モデル改訂版を青年期の友人関係に適用するため、相互作用相手の側の目標や反応、および、過去・未来の相互作用に関する情報処理を加えたものである。
- 4) 厳密には「前意識的に」とすべきであるが、回答者に馴染みの薄い用語であるため使用を避けた。
- 5) 「『ある』の方は、具体的なエピソードを下の欄内にお書きください。』として45mm×150mmの空欄を示した。後述のように1エピソードのみ書いた回答者が多かったのは、「いくつでも」との文言を添えなかったことと、回答者の手書き文字に対して空欄サイズに十分な余裕がなかったことが原因と考えられる。
- 6) 彼らは自己呈示を、戦術的一戦略的、防衛的一積極的の2軸で分類している。

<引用文献>

- 相川 充（1997）. 対人関係能力の向上への手立て 名古屋大学教育学部紀要（心理学）, 44, 17-24.
- Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 浅野 智彦（1995）. 友人関係における男性と女性 川崎 賢一・芳賀 学・小川 博司（編）都市青年の意識と行動—若者たちの東京・神戸90's [分析編]（pp.53-66）恒星社厚生閣
- 浅野 智彦（2015）. 若者とは誰か—アイデンティティの30年—【増補新版】河出ブックス
- Biddle, B. J., & Thomas, E. J. (1966). *Role theory: Concepts and research*. New York: Wiley.
- Coleman, J., & Hendry, L. (1999). *The nature of adolescence* (3rd ed.). London: Routledge.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Curtis, R. C. (Ed.) (1991). *The relational self*. New York: Guilford Press.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society* (2nd ed.). New York: W. W. Norton & Company.
- （エリクソン, E. H. 仁科 弥生（訳）（1977-1980）. 幼児期と社会（1-2）みすず書房）
- Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Stanford: Stanford University Press.
- Fischer, C. S. (1982). *To dwell among friends: Personal networks in town and city*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 福重 清（2016）. 2000年代の都市青年の人間関係—友人関係をめぐる10年間の変化— 専修人間科学論集社会学篇, 6(2), 113-120.
- Harter, S., Marold, D. B., Whitesell, N. R., & Cobbs, G. (1996). A model of the effects of perceived parent and peer support on adolescent false self behavior. *Child Development*, 67, 360-374.
- Havighurst, R. J. (1972). *Developmental tasks and education* (3rd ed.). New York: David Mackay Company Inc.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 平石 賢二（2010）. 友人関係 日本児童研究所（編）児童心理学の進歩 Vol.49—2010年版—（pp.27-51）金子書房
- 石本 雄真（2011）. 現代青年における友人関係の特徴と心理的適応および学校適応との関連 発達研究, 25, 13-24.
- 岩田 考（2006）. 多元化する自己のコミュニケーション—動物化とコミュニケーション・サバイバル— 岩田 考・羽淵 一代・菊池 裕生・苔米地 伸（編）若者たちのコミュニケーション・サバイバル—親密さのゆくえ—（pp.3-16）恒星社厚生閣
- 川喜田 二郎（1967）. 発想法—創造性開発のために—中央公論新社
- 経済産業省（2010）. 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査 経済産業省 Retrieved from http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuseino_syakajinkannohaakutonintido.pdf（2017年4月22日）
- Lifton, R. J. (1967). *Boundaries: Psychological man in revolution*. London: Deborah Rogers LTD.
- 丸野 佳乃子（2014）. 女子大生の友人関係における切替についての研究 九州大学心理学研究, 15, 37-43.
- 松井 豊（1990）. 友人関係の機能 斉藤 耕二・菊池 章夫（編著）社会化の心理学ハンドブック（pp.283-296）川島書店
- 松島 るみ（2011）. 大学生における状況的・選択的

- な友人関係について 日本心理学会第75回大会発表論文集, p.176.
- Matsushima, R. (2013). The relationship between situational change and selectiveness in friendships for adjustment to the university. *International Journal of Adolescence and Youth*, DOI: 10.1080/02673843.2013.844179
- 宮下 一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合 良行・楠見 孝 (編) 自己への問い直し—青年期— (pp.155-184) 金子書房
- 内閣府政策統括官 (2009). 第8回世界青年意識調査 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html> (2017年4月1日)
- 西田 若葉・沖林 洋平・大石 英史 (2011). 大学生の多元的アイデンティティと適応機能の関連 山口大学教育学部研究論叢 (第3部), 61, 81-92.
- 西平 直喜 (1990). 成人になること—生育史心理学から— 東京大学出版会
- 丹羽 悠子 (2012). 青年期の友人関係における「状況に応じた切替」と生活感情及び本来感に与える影響 兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻修士論文 (未公刊)
- 落合 良行 (2003). 研究論文の書き方—投稿論文の審査経験を通して— 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 16-17.
- 大谷 宗啓 (2005). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替 日本青年心理学会第13回大会発表論文集, 74-75.
- 大谷 宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替—心理的ストレス反応との関連にも注目して— 教育心理学研究, 55, 480-490.
- 大谷 宗啓 (2009). 大学生の同性友人関係における状況に応じた切替と抑うつとの関連—統制の所在に着目した検討— 人間科学 (関西大学大学院), 70, 39-52.
- 大谷 宗啓 (2013). 大学生の同性友人関係における状況に応じた切替—社会的スキルとしての効果性と教育上の課題— 大阪電気通信大学人間科学研究, 15, 79-93.
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己—現代青年の友人認知と自己の発達— 世界思想社
- 岡田 努 (2016). 青年期の友人関係における現代性とは何か 発達心理学研究, 27, 346-356.
- 奥田 雄一郎 (2009). 現代社会における自己の多元化と大学生の時間的展望 共愛学園前橋国際大学論集, 9, 1-11.
- 小此木 啓吾 (1980). シゾイド人間—内なる母子関係をさぐる— 朝日出版社
- Riesman, D., Glazer, N., & Denney, R. (1950). *The lonely crowd: A study of the changing American character*. New Haven: Yale University Press.
- Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, 16, 172-186.
- 斎藤 英里香・野中 弘敏 (2011). 高校生・大学生の友人関係における自己切替と信頼感—「親友」観との関連で— 山梨学院短期大学研究紀要, 31, 47-59.
- 瀬沼 文彰 (2007). キャラ論 STUDIO CELLO 社会人基礎力に関する研究会 (2006). 「中間取りまとめ」 経済産業省 Retrieved from <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (2017年4月22日)
- 白井 利明 (2001). 青年の自己変容に及ぼす調査活動と結果のフィードバックの効果—変容確認法の開発に関する研究 (II)— 大阪教育大学紀要 (第V部門), 50, 125-150.
- 白井 利明 (2008). 青年心理学研究方法論としての変容確認法の発展—発達主体として青年を捉えるアプローチ— 青年心理学研究, 20, 71-85.
- Snyder, M. (1987). *Public appearances / private realities: The psychology of self-monitoring*. New York: Freeman.
- Snyder, M., Gangestad, S., & Simpson, J. A. (1983). Choosing friends as activity partners: The role of self-monitoring. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 1061-1072.
- 菅原 健太 (2011). 高校生における自己の使い分けと友人関係の使い分け 現代社会学研究, 24, 43-61
- 鈴木 淳子 (2005). 調査的面接の技法【第2版】 ナカニシヤ出版
- Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Psychology*, 33, 224-236.
- 鑓 幹八郎 (1986). 「エリクソン・E・H」 村井 潤一 (編) <別冊発達4> 発達の理論をきづく (pp.193-215) ミネルヴァ書房
- Tedeschi, J. T., & Norman, N. (1985). Social power, self-presentation, and the self. In B. R. Schlenker (Ed.) *The self and social life* (pp. 293-322). New York: McGraw-Hill.
- 辻 泉 (2016). 友人関係の変容—流動化社会の「理想と現実」— 藤村 正之・浅野 智彦・羽淵 一代 (編) 現代若者の幸福—不安感社会を生きる— (pp.71-96) 恒星社厚生閣
- 和田 広史 (2010). 青年期における友人との付き合い方と対人ストレスとの関連—状況に応じた切替

に注目して— 目白大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修士論文（未公刊）

和田 実（1990）. 青年の対人関係の変容 久世 敏雄（編） 変貌する社会と青年の心理（pp.83-102） 福村出版

Wirth, L. (1938). Urbanism as a way of life. *American Journal of Sociology*, 44, 1-24.

付 記

本研究の結果の一部は日本青年心理学会第24回大会にて発表されたものである。